夜のくだもの屋 (1)

少女の帰りは、毎日おそかった。

大きなコンクールのために、合唱部の練習がつづいていたのである。列車通学の少女には、下校時刻のおくれのほかに列車の待ち時間も加わって、家に帰りつくころは、いつもまっ暗になっていた。

夜の早い、小さな町である。わけて、少女の住む町はずれの団地ちかくでは、商店は宵(よい)にもならぬうちから店をしめて、人通りも少ない。なかばそれをいいことに、なかば心ぼそさをまぎらすために、①<u>少女はいつも歌いながら歩いた</u>。

フォークもポピュラーもきらいではなかったが、やはりいまのところ、毎日練習しているコンクールの課題曲が口ぐせのようになっていて、それを歌うことが多い。合唱曲をひとりで歌うのはいくらかまのぬけた感じだったが、故郷によせる思いを歌ったその曲が好きでもあったし、学校での身がまえた気持ちとちがって、勝手にのびのびと歌えるのがなによりたのしかった。

団地の入り口ちかくに、小さなくだもの屋がある。ここも、このあたりの商店の例にもれず、店じまいは早かったのだが、ある日、少女がいつものようにおそい夜道をいそいでいると、その店がまだひらかれていて、あかあかと灯(ひ)のともっているのが見えた。

②<u>——おや、きょうはなにかあったのかしら。</u>

しかし、近づいてみると、べつに変わったことがあったようでもない。それでも、店のまえをとおるとき、少女はふと足をとめた。場末の小さな店だと思って、めったにそこで買いものをすることもなかったのだが、いま見れば、小さいなりになかなかりっぱな店なのである。りんご、バナナ、ぶどうにメロン、みんなそれぞれの光沢(こうたく)をうかべて台の上にもりあげられ、それになによりも、店いっぱいにあふれるオレンジ色の光が、なんともいえずあたたかい。暗い道路にこの店のあかりがさしているだけで、わけもなく心がおちつくのをおぼえ、少女は、とぎれた歌をまた口ずさみながら、かばんを持ちなおして家へといそいだ。

くだもの屋の営業時間延長は、その日かぎりのことではなかったらしい。つぎの日も、そのつぎの日も、少女は、③<u>くだもの屋のあかりに守られながら</u>、暗い夜道を帰った。

（杉みき子『小さな町の風景』偕成社　所収「夜のくだもの屋」による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「少女はいつも歌いながら歩いた」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア コンクールが近いために合唱部の練習がつづいており、下校時間がおそくなるうえに列車の待ち時間も加わるから。
イ 団地のちかくで住む人もいるのに、日が暮れないうちからしめてしまう商店に反感を抱いたから。
ウ 夜道に人通りが少ないので周囲に気兼ねする必要がなく、また暗い夜道での不安な気持ちをまぎらわせたかったから。

〔　　〕

(2) ——線②「おや、きょうはなにかあったのかしら」とあるが、「少女」はなぜこのように思ったのか。適当なものを選びなさい。

ア このあたりの商店にはめずらしく、いつもおそくまで店をひらいているくだもの屋が気がかりだったから。
イ いつもは店じまいの早いくだもの屋が、おそい時間まで店をひらいていたので不思議に感じたから。
ウ めったに買い物をすることもないくだもの屋だったが、意外にりっぱな店であることに気づいたから。

〔　　〕

(3) ——線③「くだもの屋のあかりに守られながら」とあるが、これは「少女」のどのような様子を表しているか。適当なものを選びなさい。

ア 暗い夜道にくだもの屋のあかりが差していることで、ほっとする様子。
イ 心細いときに、かつてのくだもの屋のあかりを思い出して安心する様子。
ウ くだもの屋のあかりがともっているかどうかをいつも気にする様子。

〔　　〕